火狩りの王

〈四〉星ノ火

人の子の罪に　野はあえぎ
神々の過ちに　星は燃ゆ

いまや　なべて生けるものの臨終なれど

狩り人よ　この苦しみの畑に
日々を身籠る光の穂を刈れ

第七部　野辺の道

一　満ち潮　8
二　ほとり　43
三　灰　62
四　橋　74
五　虚空の娘（こくうのむすめ）　105
六　紅色　133
七　波　158

第八部　地の迎え火

一　天の獣（けもの）　204
二　火柱　224
三　地中の宮　249
四　灯（とも）し火　306
五　光　356
六　千年彗星（せんねんすいせい）　380
七　祈（いの）り花　386
〈終章〉　409

灯子　十一歳の少女。自分をかばって命を落とした火狩りの形見を家族にとどけるため、首都へ向かう。
煌四　首都に暮らす十五歳の元学生。油百七の元で、雷火の研究を行う。火狩りを父に持つ。
かなた　灯子が出会った火狩りが連れていた狩り犬。火狩りとともに行動し戦う。
緋名子　煌四の妹。胎児性汚染により生まれつき病弱。体に大きな異変が起きた。
明楽　流れ者の女火狩り。困難をこえていく力量の持ち主。狩り犬はてまり。
火穂　厄払いの花嫁として村を出された。回収車で灯子と出会う。
照三　回収車の乗員。灯子たちを首都に連れて行くとちゅうで大けがを負う。
クン　〈蜘蛛〉の子ども。森に捨てられていた。
炉六　島出身の凄腕の火狩り。狩り犬はみぞれ。
油百七　燠火家の当主で偽肉工場の経営者。煌四に雷火による武器開発を指示。
綺羅　燠火家の一人娘。美しく聡明。
火華　油百七の妻。年齢不詳の妖艶な夫人。貧民区の出身。
ひばり　神族。風氏族に属し、人間を監視するしのびを自在に操る。
瑠璃茉莉　神族。木氏族に属し、植物を操る力を持つ。
シュユ・キリ・ヤナギ・クヌギ　首都の隔離地区に住む木々人たち。
くれは　燠火家の使用人だったが、行方知れずとなった。

第七部　野辺の道

一　満ち潮

日は大きくかたむき、世界そのものがぐったりとかしいでいるかに感じられた。

水は絶えず揺れ動く。空に蓋をする雲に、山のほうへ位置をずらした太陽の火がおぼろに照って、空いちめんが銀色に染まっている。体をとりまく海の中は、空とは裏腹に黒々としていた。あと数時間もすれば暗さを引きよせはじめる沖の空からではなく、夜はじわじわと、海の底から吐き出されつつあった。

音が感覚を支配している。波の揺らぎが耳にも皮膚にも絶え間なく響き、自分が息をつぐ音すら、異様に大きく感じられた。

黒い森から海へ出て、首都へもどる。黒い森と工場地帯をへだてる急峻な崖は、海が見えるところまでつづいている。人工的な壁にさえ見える崖のむこう、工場地帯側には、調査船が乗り入れるための巨大な水路が横たわっているのだった。崖にはばまれて陸路で首都へ入ることはできないが、陸地を左手に見ながら海を泳いでゆけば、工場地帯に近づくことができる。ただし、潮の流れに注意していなければならなかった。潮の引く時間になれば、海から首都へはおろか、陸地自体に近づくことが困難だ。

森に残った灯子たちは、もう虫を見つけただろうか。〈蜘蛛〉が毒虫で操ったために炎魔の数がすくなくなっているとはいえ、煌四たちはわずかのあいだに三匹の獣と行きあった。灯子が怒りをあらわに言ったとおり、だれよりも強いのだと信じてきた煌四たちの父親も、森で炎魔の歯牙にかかって死んだのだ。明楽の鎌で切りぬけられることを、祈るしかなかった。かなたが全員を守りぬいてくれることを。

暗い色をした水がうねる。煌四は、森で寄せ集めた木の束につかまって泳いでいた。炉六に指示されてかわいた枝を集め、縛っただけの急ごしらえのものだが、どうにか水に浮かべることができ、細い枝や木の断面に顔や手を引っかかれることに耐えれば、危なげながらもつかまっていることができた。気休め程度の救命具だが、とにかく指先にすがるものがあるということが、煌四が水の中であわてふためくのをかろうじてふせいでくれていた。

煌四は毎日、景色の中に海を見ながら育った。坂になった町のいたるところから、学院の窓から。……しかし、海へ入ったことはなかった。工場からの廃液で汚染された海は、個人が魚を獲

ることさえ禁止されている。その水にふれることすら、煌四にとってはいまがはじめてだった。
片腕を使えなくなった火狩りも、その狩り犬も、揺れ動く水中を器用に泳ぎ進んでゆく。そのうしろを、煌四は必死についてゆこうとしていた。が、身動きはことごとく波の複雑な揺れに左右され、自分がまともに進んでいるのかどうか、確信を持つことができない。呼吸も思うようにできない海の中で、水にあらがわずにいれば潮が勝手に運んでくれるという炉六の言葉だけが、しびれる頭の芯に残っていた。
陸へむけてふくらんでゆく水の動きに乗って水路へ入れば、首都——工場地帯へたどり着く。排水口が無数に穿たれた護岸が近づいてくる。ごぼりという音を耳がとらえて、もう何度めかで、頭が波の下へ沈んだ。あわてて、木の束にしがみつく。が、力をこめるとたよりない道具は煌四の体重を支えることができず、かえって水の中へ投げ出されそうになった。
眼鏡をはずしているうえ、水中ではほぼものを見ることができないが、それでもここへ来るまでに、人の形をしたものをいくつか、見た気がする。だれであるのかわからない人の影は、暗い水の中を、さらに暗い深みへむかって、ゆっくりと漂い去っていった。
死者の記憶がためこまれてゆく海。火穂はその死者たちの守り神を、実際に見たのだと言っていた。守り神に宛てて灯子が手紙を書いたのだと、だから首都へ来られたのだと。

ひときわ大きな水路へ入る。護岸の側面に幾すじかの配管が走っている。いまは南方へ旅立っている、調査船のための港だ。かつて炉六も、船に忍びこんでここから首都へ入ったのだろう。
水路の先には調査船の格納庫が、錆も汚れもあらわに、鉄骨をむき出しにした金属の腹の中身をごっそりと見せてそびえている。
護岸に打ちこまれた梯子をのぼって水路から脱出すると、全身へ一挙に重みがのしかかった。舗装の上へ炉六がひざをつき、深く呼吸しながら周囲へ視線をやる。あたりに人の気配はない。
肺がもっと空気をほしがっていたが、煌四は舗装のふちへかばんをおろして、ふたたび梯子をおりた。前脚で水をかいているみぞれの胸の下へ腕を入れ、かかえあげる。十段ほどの錆びた鉄の梯子が、ぬれた犬の重みのぶん、ぎしぎしとてのひらに食いこんだ。綺羅にさえなつかないくせをして、みぞれは主のもとへたどり着くまで、煌四におとなしくかかえられていた。
身をふるって水を飛ばす犬のほかに、工場地帯に動くものはない。
「……いやなにおいだ」
炉六の声は、船が留守にしている水路の空間に、すみやかに消えた。
狩人は犬のかたわらに立ちあがる。そのひざがしなやかに動くのを、煌四は驚嘆をこめて見やった。こちらはまだ呼吸も整わず、ぬれた衣服とひえた体が地面にへばりつこうとするのを持

ちこたえるのに精いっぱいだ。
それでもどうにか体を起こして眼鏡をかけ、炉六とみぞれが物陰に身を隠すのについていった。かばんの中身もずぶぬれだった。帳面の中へ隠した母の手紙も、溶けたインクにまみれてもうだめになっているだろう。からの雷瓶に封じた願い文だけは無事だ。
工場はどれも仮死状態にあった。船祭りの時期をのぞいて止まることのない機械群が、重く沈黙している。鉄骨や煙突がかしぎ、建物の骨組みがむき出しになっているのが遠くに見える。ちぎれた金属製のロープが、鉄塔に引っかかって垂れさがっている。――これがすべて〈蜘蛛〉に力を貸し、人間たちがしこんでおいた火の種によるしわざなのだろうか。
生々しい破壊のあとも、野ざらしにされた悲しい骸のように見えた。破壊をまぬがれた建物や巨樹がそれらを見おろす。じっとりとした熱気が、いまだに空気の中に残っていた。
ここに、いったいどれほどの者が生き残っているだろう。……
炉六が短いため息をつく。無残なありさまの工場地帯に呆然としていた煌四は、視線を無理やり目の前の火狩りへもどした。
「やれやれ、また神宮まで行かねばならん。せめて明楽たちがもどる前に、こちらにまた火の手があがることがないようにしてやりたいところだが」

「いまは……どこかが燃えているようすはないですが」
人体発火をかかえているのは人間だけでなく、神族もまた火に近づけば発火を起こす。あらゆる手を使って、火種をつぶしてまわっているにちがいなかった。煌四が視線をめぐらせようと頭をあげると、耳の奥がかすかに痛んだ。耳に水が入っている。
静かだ。風もなく、排煙のとぎれた空を飛ぶ鳥もなく、膨大な重みの空気が、工場地帯に沈殿している。
炉六のかたわらですました顔をしていたみぞれが、ぴくりとどこか一点へ意識をむけた。犬はほっそりとした鼻面に鳴き声をふくませると、主を見あげながら歩きだそうとする。炉六は問いかけるようなまなざしを犬にむけ、煌四にはわからない短いやりとりをかわした。
「人の声がするな」
炉六が言ったが、煌四にはなにも聞こえない。
「神族か〈蜘蛛〉か、それとも〈蜘蛛〉のまねをして火をつけてまわっている人間かはわからんがな。なににせよ、見つかっては面倒だ――おい、みぞれ。行くな」
前へ進もうとする犬を、炉六が低めた声で呼び止めた。みぞれは、不服そうな顔を一瞬だけふりむけ、踏みとどまる。

火狩りは自分の狩り犬の頭を左手でなでると、背すじを伸ばして煌四を見おろした。
「二手にわかれるぞ。あの木々人の娘が負傷した火狩りたちをたすけているとすれば、回収車の格納庫付近のはずだ。あの一帯の火はトンネルをふさいだ神族によって消されていただろうし、けが人を大量に移動させることはできんからな。お前の妹もいっしょにいるだろう。探して、見つけてこい」
でも、と出かかった言葉は、相手の鋭い眼光にひしがれて形にならなかった。炉六の視線にこもる重さは、煌四の意思など簡単に押しつぶすほど威圧的だった。
「願い文は三つある。神宮へとどける前に共倒れをしては、意味がないのだ。分散させて、おれがだめだったときはお前が持ってこい。生半なことをすると、またあのチビ娘にどなられるぞ」
炉六の顔の色が褪せている。右手の重傷にくわえて、海に体力を持っていかれているにちがいない。
「待ってください。体だけでも、かわかさないと。体温がさがりすぎて、動けなくなります」
そう言う煌四の歯の根が、すでにあわなくなっている。炉六のおもざしが、鋭利であるのに消え入りそうに静かに見えて、それが煌四を不穏な気持ちにさせた。
「着るものはどこかで調達する。〈蜘蛛〉の死体からでももらっていく」

炉六がきっぱりと言う。これ以上の聞く耳は持たないと、言外に告げていた。
「……」
黙って視線をさげる。それ以外の返答は、すべて時間を無駄にするばかりだ。すなおにうなずく自分を、まるでまだ学生のようだと思った。
みぞれがもう一度、青灰色の毛並みに染みついた海の水をふり落とそうと、細い体をふるう。そうして、甘えたようすで炉六の足に自分の耳をこすりつけた。
炉六は、首に巻きつけるようにして運んできた火袋を肩からおろし、結わえた紐の部分をにぎってこちらへつき出した。中身のとぼしい火袋が、たよりなく宙に揺れる。煌四はなにも言わず、火狩りの収穫をうけとった。
「綺羅お嬢さんも神宮にいるのだろう。さっさと妹を見つけて、連れもどしに来い」
言うなり、炉六は神宮へむけて歩きだし、みぞれがしなやかにつき従った。
なにか言葉をかけなければと焦りながら、結局煌四は、無駄のない動きで歩き去る火狩りの背中を注視していることしかできなかった。狩衣の肩が、骨ばって見える。首すじへ垂れた長い髪が、囚人をつなぎとめる重い鎖のようだ。そのうしろすがたを、武骨さをむき出しにした工場地帯の路地があっというまに隠してしまう。自由がきかないはずの体をそれでも操って、犬を連れ、

火狩りは行ってしまった。
息を整えようとし、ひえきった体ではそれは無駄な努力だとさとって、煌四は炉六たちが去った路地とはべつの方角へ重たい足をむけた。
（〈揺るる火〉は、選んだんだろうか。姫神のかわりになるかどうか。――自分の中にある火をどうするのか）
つぎの姫神を決める手立ての一つとして、綺羅が利用されようとしているのだ。いったいどのような形でかはわからない。綺羅を〈揺るる火〉の入れ物にするのだとひばりが言ったが、それがどんな状態をさすのか、煌四にはうまく理解できなかった。
麻芙蓉のもたらす作用から、まだ回復しきっていないはずなのに――ほんとうは綺羅は町の屋敷にいて、安全な部屋の中で、使用人たちに手厚く世話をされているのではないか。神族の手などおよばない場所で、体が回復するまでの時間をじっと耐えているのではないか。幻覚を見せるのだという麻芙蓉が、綺羅の意識から、いま首都で起きている惨状を遮断していればいい……
頭蓋の内側がしびれて、秩序立ててものを考えることができなかった。とにかく、引きずってでも体を動かさなくてはと、本能的に思った。寒気が皮膚をつき破り、肉や骨に食いこむ。体温

がさがりつづければ、命にかかわる。
この期におよんで自分の生死の心配をしていることが、無性に腹立たしく、同時にもの悲しくなった。煌四が使い道を考案した雷火に撃たれて、たくさんの〈蜘蛛〉が死んだのだ。ぬかるむ土の上の累々たる死体は、いくつあったのか、大まかな数すら見きわめていない。近くにたおれていた、自分の足にふれた死体のすがたすら――その体格も特徴も、煌四はおぼえていなかった。ただ、無残に壊れた体、炎魔の毛皮をまとった黒いかたまりだとしか、見えていなかった。
（……町は、どうなってるだろう）
照三や火穂、避難した工員たち、それに力を貸してくれた学院の教師たちに、災いがおよんではいないだろうか。燠火家の、まだ残っている使用人たちにも……
壁や塀、鉄塔やタンクをやりすごすたびに、あっていいはずのない光景が眼前へ現れる。黒くなって崩れた何棟もの工場、へし折れた起重機、内側からめくれあがって裂けた配管――火による破壊のあと。
まだらな傷におおわれた工場地帯の足もとを、勢いを失わない水路の水が流れてゆく。
自分の呼吸音だけが寒々と響く耳の底に、遠い獣の声がいくつかかさなって、さまよいこんできた。――犬の声だ。前方から、犬の鳴き声がする。すがたは見えない。金属の建物にはねかえ

りながら、犬たちの声がするのを、煌四の耳がとらえる。自然と歩みは速くなった。
容赦のない破壊にさらされた建物や、裂けてたおれた巨樹のために、自分のいる正確な位置がわからなくなる。地面までもがゆがんでいるのか、水路の水があふれて、路上にしぶきを噴きあげていた。
犬の声をたよりに進もうとしたが、遠い音はでたらめに反射し、方角を見きわめることができなかった。――これでは、緋名子を探し出すことなどできない。
焦りにつき動かされるように前へ進もうとし、しかし黒くなった建物の残骸をまわりこんだとたん、煌四は歩みを止めた。
ひときわ大きな工場が眼前に現れた。足の裏から寒気が駆けあがる。鈍色の塀が、いくつもの棟からなる工場をかこんでいる。高い塔も煙突も、無傷だった。炬口家の、製鉄工場……昨夜、空へ何度もいかずちをはなった打ちあげ機のある工場だ。
しんとしている建物から、異臭がする。倉庫の扉が解放されているらしく、そこからにおいが発せられている。水びたしになっている通路をわたればすぐにたどり着く。無意識に隣接する建物の残骸に身を隠しながら、体の芯を躊躇させる異臭の源へ、近づいていった。――と、あとわずかで中のようすがのぞけるというところで、突然だれかにうしろから肩をつかまれた。

「おい」
心臓がはねあがる衝撃といっしょにふりむくと、そこには、二人の男が立っていた。
「なんだ？　まだ逃げ遅れがいたのか？」
煌四は息をつめたまま、二人の男たちを見つめた。煌四より頭二つほど上背のある若い男が、きつい視線をこちらへむけていた。灰色の作業着が、機械油とはちがうなにかで汚れている。
そのとなりの、背の低いずんぐりとした体形の男が、いぶかしげに下あごを横へずらしている。こちらも同じ作業着すがたで、きっちりと足にあった黒い革靴をはいている。その靴紐がまだ新しいのを見て、煌四のこめかみに違和感が引っかかった。
「ほら、きみ、少年工にも避難命令は出ただろ？　なんで逃げなかったの」
背の低い男が、いやに大きく特徴的な目でこちらを見あげた。こたえるひまもなく、つぎの瞬間、煌四は勢いよく胸ぐらをつかまれていた。
「もしかしてお前、〈蜘蛛〉に手を貸すって、あっちこっちに火をつけてやがる連中の仲間か？　正直に言えよ、おい」
顔の間近ですごまれ、煌四はあわてて身をよじった。地面から浮かびそうになったかかとに体重をかける。

「ち、ちがいます」
黒ずんだ大きな手を、必死でふりはらった。煌四の全身が海水でぬれていることに気づいた男たちが、怪訝そうに顔を見あわせる。
「ひょっとして、学院の人？」
背の低いほうの男が、体ごとかたむけるように首をかしげる。汚れてずぶぬれになってはいるが、たしかに煌四の身につけているものは、少年工のいでたちとはちがっていた。煌四はじりじりと二人の男たちから距離をとりながら、それぞれの顔を見やった。
「なんだよ、教師の手伝いでもしに来たガキかあ？」
煌四が返事もしないうちから、若い男が顔をしかめ、かたわらの路面へ唾を吐いた。
「気に入らねえよ、学院の先生どもは。こっちの人間をすぐに逃がすための権限は持ってたんじゃねえか。家が金持ちなんだろ、どいつもこいつも。それだってのに、ずたぼろで帰ってきたっていう回収車の乗員が言い出すまで、避難の呼びかけもしねえで。空に星が飛んできただなんだって、ガキみたいにはしゃいでやがったんだ」
「待機中の回収車のすぐ近くで、物騒なことが起きたしねえ。出発直前だったっていうのに」
苦々しげな表情をした二人の、灰色の作業着、そろいのまだ新しい革靴。

「乗員なんですか……？　回収車の」
自分の声が、耳につまった水のせいでやけに小さく聞こえる。帰ってきた乗員というのは、照三のことだ。工場にいる人間への避難の呼びかけを提案したのは照三だ。首都にいる回収車の乗員たちにも声をかけて、いまの状況を説明したのかもしれない。
煌四の問いに、作業着にずんぐりとした体を押しこめた男がうなずいた。
「そう。せっかく厳しい試験にうかってさあ、家族も報酬を心待ちにしてるっていうのに。急遽招集をかけられて、大あわてで整備して、燃料と物資と人間かき集めてさあ。いよいよ乗りこむってときだよ。神族がトンネルをふさいじゃったって、なんなの、まったく」
「町は？　町は大丈夫なんですか？」
煌四が身を乗り出すと、表情の読みとりがたい小柄な男が、口から前歯をのぞかせた。どうやら、笑ったようだ。
「いまのところはね。〈蜘蛛〉が人間をたすけてくれるんだって言い張る連中と、そうじゃない者たちで小競りあいが起きる程度。火は燃えていないよ」
「お前、学院の教師連中にも言っとけよ。けが人運ぶのに、もっと人手をよこせって」
そう言うなり、回収車の乗員だという二人は煌四に背をむけ、歩きだそうとする。煌四はあ

わてて、体格差の大きい男たちに呼びかけた。
「ま、待ってください。けが人って、火狩りたちのことですか？　学院の教師たちも、こっちへ来てるんですか。工場地帯は、いまはどうなって――」
追いかける煌四をうるさそうにふりかえって、背の高いほうの男が手短に言った。
「なんだ？　学生じゃなくって、やっぱり逃げ遅れか？　なら、さっさと町に……」
「妹を探してる」
声を強めて言うと、乗員たちはまた顔を見あわせた。現実ばなれした空間を、二人の男たちは平然と歩いてゆく。
「妹？　いくつくらいの？」
煌四はうつむいてくちびるを噛み、声を引きずり出した。
「八歳……だけど、体が小さいから、もっと幼く見えると思う」
「工場勤めの子どもなら、ぼくらの見てきたかぎりじゃあ、もういないようだったけど……」
二人の乗員たちはたがいに顔を見あわせ、肩をすくめて、それらしい子どもを見かけてはいないことを確認しあった。
「ガキの退避はかなりあとまわしだったというが、それでもちゃんと逃げたんだろう。おれたち

がこっちへ来たときに残ってたのは、もう死んだ工員ばっかりだった」
「ぼくらは、生き残ってる火狩りたちを町へ運んでたんだよ」
背の低いほうが、作り物めいて大きな目で煌四をふりかえった。
「もう、いま工場地帯に残ってるのは、ほぼ手当ての必要のない者か、手遅れの者ばかりだな。だけどそれも少数で、ほとんどの火狩りは町へもどしたよ。飼い主が負傷して町へ担いでいかれたというのに、犬たちがこっちに残っちゃってさ。あとで、犬と火狩りの登録番号の照合をしなきゃならないの、結構な手間だよ」
「登録番号だのなんだのは、神族の仕事だろうが。これ以上手間をふやされてたまるか。あのにおいのせいだろ。森の中で、火狩りや村人をたすけてる連中と、あれは同じなんだろ。あのにおいのそばにいりゃ、犬どもは安全だと思うんじゃねえのか」
「ひどいにおいだよ。炎魔よけなんだっていうけど……」
小柄な男が、仲間にむかって歩きながら歯をむき出し、顔をしかめた。
「くさいといっても、貧民区のやつらと大差ねえよ。ほんとはもう町に逃がして、休ましてやりたかったのによ……あのばかでかい図体の化けもんはともかく、けが人をたすけるのに駆けずりまわった姉さんは」

「それが、だめなんだって。木からはなれると、体がもたなくなっちゃうんだそうだ」
耳につまった水が、キンと高い音を立てた。
「木々人、ですか？　いま、どこにいますか」
あわてて問う煌四に、男たちはますます怪訝な目をむける。
「でかい木々人は用事があるとか言って、どこかに行っちまった。――木々人の姉さんは、見失った。仲間のとこへ行ったのかもな。なにしろこっちも、あちこち走りまわってたからな」
若い乗員が口もとをゆがめて、くやしそうな表情をあらわにしたつぎの瞬間、突然目の前に、その暗い空間は現れた。
火を貯蔵してある塔のような筒状の小型タンクが四基、ならび立っている。鉄柵や梯子、配管が交差するその下に、夜の先やりとして暗がりがわだかまっている。直立するタンクの下に、犬たちがいる。耳の垂れたもの、毛足の長いもの、まだ若いもの、ひどく気が立っているもの……主のいない狩り犬たちが、一つところに群れている。犬たちは急に現れた煌四を警戒してうなりだすか、あるいは上目遣いにこちらを見やって、悲しげな音を鼻の奥に響かせる。十数頭の犬たちのかこむ中心に、布がいくつも横たわっていた。
「……これは」

寄せ集めの布なのだろう。素材も色もまちまちだ。が、それらはひとしく同じ形のふくらみを持っていた。頭部はまるく盛りあがり、その下の体はいやに平たく、足の部分がとがり気味にふくらんでおわる。布の下には人が入っているのだ。下に敷かれた布は薄く、路面とじかにふれているのと変わらない。負傷者をあんなところに長く寝かせてはおけないはずだ。そして、まだ生きている負傷者であれば、頭まですっぽりおおい隠したりはしないだろう。
二列に足をむかいあわせる恰好でならぶ人体の中には、ひどく小さなものもあった。
「けが人、だよ。逃げ遅れたり、あわてて機械にはさまれたりしたんだろうねえ。あちこちの工場に、死んでいる人たちがいるんだよ。負傷した火狩りたちの搬送はもうおわったから、今度は亡くなっている人たちを探して、亡骸を集めているんだけどね。なにしろ、人手不足でさ。夜間の照明、まともにつくのかな」
ならび立つタンクのすきまから、炬口家の製鉄工場を見ることができた。
「さあな。つかなきゃ、祭り船の照明でも借りてくるさ。金持ちはこういうときに、たりねえものを提供してくれんのが役目だろうよ。――ほんとはこいつら、屋根のあるとこへ置いてやりたいのによ、使用許可がおりなきゃ、工場の建物を勝手に使うなだと。ふざけやがって。最後まで機械にしがみついたままのじいさんや、一人で逃げらんなくなって死んでたチビを、なんとも思

わねえのかよう」
黒い機械が、製鉄工場の屋上に載っている。雨風と排煙にさらされてくすんだ建物の上で、新参のその機械は、明らかに異物めいていた。夜のあいだに、幾条もの稲妻を空に走らせたはずの打ちあげ機は、灰色ににごった空気をせおって沈黙している。
屋上に警吏の影が一つ、いや二つ見えた。機械の周辺を調べているのだろうか。建物の下にいるらしい犬が、屋上にむかってうるさく吠えるのが聞こえてくる。
油百七は雷火を携行し、使用人と工員たちを引き連れて神族に戦いを挑みに行った。あの打ちあげ機の用途を、警吏たちは知らないだろう。夜のあいだに空を裂いたいかずちは、なにも知らない者たちには神族の起こした現象に見えたはずだ。もうあの黒い機械を動かす者はいない。
それでも、悪寒が背骨に食いこんだ。
警吏の一人が機械の操作盤から顔をあげ、神宮の方角を見やったように思われた。
寒さから逃げるように、一歩前へ出た。犬たちが鼻を動かす。
「しょうがないでしょう。規則は規則。この布類を勝手に使ってるだけでも、ひやひやしてるんだよ。これ、盗みだよ盗み。お前、よく乗員試験にうかったよねえ」
小柄な男が、どこか魚じみて大きな目を仲間へむけ、それからこちらへむけた。

「妹さん、この中にいないか、念のためたしかめる?」
さし出された問いに、煌四の視界が明滅した。体がかしぎそうになって、あわてて目をつむり、頭をふる。
「……この人たちを、どうするんですか?」
どれも、もう身動きをしていなかった。いくら見つめていても、胸も腹部も上下しない。
煌四の問いに、乗員たちは異様なものを見る目つきをむけた。若い乗員が、苦々しげに表情を険しくする。
「どうって、町まで運んで、身内のもとへ送りとどけるんだろうが」
ぞんざいな声の底には不審げな響きが混じっており、相手が煌四の正気を疑っているのが伝わってきた。
首すじをざわつかせて頭のうしろへ、ひときわ鋭い寒気が走っていった。豪雨が工場地帯を襲ったのが、遠い昔のことのようだ。――シュユ。小鳥をみごとに捕まえたあの幼い木々人の亡骸が、灯子のそばにあった。シュユを探しに、キリは地下居住区を出てきたのだ。それなのに、自分たちはあの小さな骸を、置いたままにしてきた。
頭蓋のどこかで、ぐじゅっと音がする。いや、これは耳に残っている海水の立てる音だ。死者

が漂っていった海の水の。
ここに横たわる者たちの数よりも頭数の多い犬たちが、黒い森のにおいを嗅ぎつけたのか、一定の距離を置いて煌四に注意をむけつづけている。犬たちの目が、煌四が自分の輪郭だと思っているものを薄れさせてゆく。
丁寧にならべられた死体から視線をあげて、もう一度工場の屋根の上を見やった。
緋名子のふるう鎌が操作盤を破壊した栽培工場の機械とちがい、こちらは雷火をこめさえすれば、まだ動かせる。屋上でおとなしくしているあの機械は、まだ死んでいないのだ。
煌四は頭の中に、機械の設計図を呼び起こしていた。二度と使えないようにしておかなくてはならない。
「すみません、行かないと。学院とは、ぼくは関係ありません」
その場をはなれようとする煌四に、乗員たちがおどろいたようすで身じろぎする。
「行くって、おい、そっちは……」
首都や世界の行く末よりも、妹を探すことよりも、ここに生身でいる自分のなすべきことはあの機械を完全に壊すことだと、なにかに追い立てられるように煌四は、塀に守られた巨大な工場のそばへもどろうとした。

「やめとけ。製鉄工場には、探してる妹はいねえよ」
乗員が、煌四の肩をつかんだ。
「あそこは、建物じゅう血まみれだ。だれだか知らねえが、頭のおかしなやつが馬一頭つぶして、ぬいた血をばらまいたらしい」
「一応、中に人がいないか、見てみたけど――もうだれもいないようだったよ。逃げたんだろう。屋上に見たことない機械が設置してあったけど、それまで血がべっとりだった」
こみあげてくる吐き気を、煌四はのどに力をこめてどうにか押しとどめた。
（しのびを近づかせないためだ）
油百七と同行者たちは、全身を血で染めていた。それだけでしのびは効力を失ったし、ひばりは近くへ寄ることへの嫌悪をあらわにしていた。神族は、生き物の血液を必要以上にきらう……〈揺るる火〉の首をわしづかみにする使用人に、ひばりは直接むかってゆくことすらしなかったのだ。
「……行かないと。あの機械を、止めておかないといけないんです」
「どうせ、中へは入れないよ。ぼくらが調べたあと、なんでだかあの工場へは警吏が入りこんでいる。きみみたいな子どもが行ったら、問答無用で捕まるよ。妹を探すんじゃないの？」